

社会教育士の資格を有する特別支援学校教員の社会教育に関する認識の検討

Examining the Perceptions of Special Needs Schoolteachers with Social Education Qualifications regarding Social Education

験馬香穂*

Kaho KENMA

稲垣卓司**

Takuji INAGAKI

山口穂菜美**

Honami YAMAGUCHI

藤川雅人**

Masahito FUJIKAWA

要旨

現在、社会教育士の資格取得が推進されており、学校内に社会教育についての視野を持った教員が必要である。特に特別支援学校の教員は、障害を有する児童生徒と地域を繋げる役割を担う。そこで、特別支援学校に勤務する社会教育士の資格がある教員3名を対象として、社会教育に関する認識のインタビュー調査をし、テキストマイニングによる質的研究を行った。その結果、「学校と地域を繋げる教員の働き」、「社会教育の視点での子どもたちとの関わり」、「一緒に活動することで伝える特別支援教育の魅力」、「共生社会の中で障害のある人と関わるハードルを下げること」、「理想と現実のギャップ」、「子どもと地域と学校について伝え合うこと」、「授業の可視化」の7つの認識のカテゴリを抽出できた。

〔キーワード〕 特別支援学校教員 社会教育 社会教育士 地域住民 コーディネーター

I 問題と目的

特別支援学校は近隣の学校の特別支援教育に関するセンター的機能の働きももち合わせており、地域との連携や協働が重要となる。特別支援学校は遠方から通う児童生徒が多い一方、地域の人との日常的な関わりの機会が少ない。原田(2011)は「将来の地域生活において必要となる力を身に付けさせる学習課題に取り組む際、教室内の学習だけでは模擬的な体験にとどまり、実際の生活に生かされないことがある。そのため、教室での学習を実際の体験へ発展させることが必要となり、地域に出て校外学習や交流学习等による取組を行うことも多い。しかし、経験・体験することのみで終わってしまい、将来の生活において実際に活用できる力が身に付くような授業となっていない場合もある。そこで、将来の生活を見据えた目標を設定し、児童生徒が地域に対する理解を深めながら、実際に活用できる力を身に付けさせる授業を行うことが必要である」と指摘している。特別支援教育という自立や発達に支援が必要な子どもたちに

*雲南市立三刀屋小学校

**鳥根大学教育学部特別支援教育専攻

とって地域社会での学びは効果的であり、学校側が積極的に地域社会との連携を図る必要がある。

障害のある人のライフステージ全体を豊かなものとするため、学校教育段階から将来を見据えた教育活動の充実を図るよう、特別支援学校学習指導要領（文部科学省，2017）の総則に「生涯学習」の文言が加えられた。障害のある児童生徒が在学中から地域社会の活動に参加し、楽しむ機会をもつことによって、「生涯を通じて幸福で健康な生活を追求しながら、地域コミュニティの中で支え合いつつ、自立して社会生活を送ることができる」（文部科学省，2018）ようにする必要がある。

一方で、現在学校内部から地域と学校を繋ぐ役割として社会教育士が活躍しており、現職教員にも資格の取得が推進されている。社会教育士は地域人材や地域資源に精通したコーディネーターを行うことができ、地域と連携することができる人材である（文部科学省，2020）。また、社会教育士は社会教育主事と異なり、役職を任命されていなくても名乗ることができる資格である。学校づくりにおいては、地域との連携が重要であり、地域に開かれた学校づくりが推進されている。その背景には、地域社会と連携することで教員の負担軽減を図ろうという意図があると考えられる。そのため、コミュニティ・スクールやチーム学校などの制度や組織作りが促進されている。この地域社会との連携において、学校側と地域社会側の橋渡しの役割を担う窓口が必要である。学校においては、地域支援を担う分掌の組織編成が進められるとともに、校長などの管理職や地域連携コーディネーターなどの教員が窓口となっている（スクール・アドバイス・ネットワーク，2013）。

地域とのネットワークづくりや多様な学習環境の提供が重要視される中で、窓口となる教員の社会教育士の取得が推進されている。しかしながら、人と地域を繋げる専門家である社会教育士の資質や力量が発揮されるような環境は必ずしも整備されていない（若園，2022）。2020年の4月に社会教育士制度が開始され、2023年10月現在4,500人が資格を取得しており、自治体を対象にした調査では社会教育士は学校との連携を望む声が多い（鈴木，2023）。

教員も社会教育士を取得しているものの、特別支援学校の教員による取得は現段階では少ないことが想定される。特別支援学校の教員には、地域に対して子どもたちの学びの姿を伝え、学校や障害への理解を図る取組が必要である。卒業後は地域で暮らし地域の住民と共に活動する者が多いため、学校と地域を繋ぐ役割が求められている（藤本，2022）。また、山口県立山口南総合支援学校（2019）は、障害のある子どもたちだからこそ共生社会の実現に向けて地域連携の仕組みが必要であると指摘しており、特別支援教育に携わる教員は障害を有する児童生徒と地域を繋げる役割を担う必要がある。

社会教育士は専門家としての役割を期待されているが、その資格を有する特別支援学校の教員に関する知見はこれまでのところ蓄積されていない。社会教育士の資格を有する特別支援学校の教員の社会教育に関する認識を明らかにし、これまで取り組んできた実践や課題を検討することによって、地域との連携の充実を図る必要がある。

以上のことから、本研究の目的は、社会教育士の資格を有する特別支援学校の教員が、社会教育についてどのような認識をもっているのかを検討することである。

II 方法

1. 調査対象者と調査期間

特別支援学校の経験を有し、社会教育士の資格を有している S 県立 A 特別支援学校の教員 3 名を対象とした。A 特別支援学校の障害種は肢体不自由である。調査期間は、2023 年 10 月 17 日と同年 10 月 24 日の 2 日間であった。倫理的配慮として、研究の趣旨と方法、秘密の保持、研究の参加は任意であり、得られた情報は研究以外で使用しないこと、公表の際の匿名性の保持、途中辞退が可能であることを個別に書面と口頭において説明し、同意を得て実施した。

2. 調査内容

基本属性として、所属学部、教職経験年数、特別支援学校勤務年数、現在の勤務校の勤務年数、社会教育士経験年数を尋ねたのち、「社会教育士の役割」、「社会教育士講習を受けるに至った経緯」、「社会教育士の取得後の変化」、「具体的な実践例」、「特別支援教育における社会教育士としての課題」、「工夫していること」、「社会教育士の取得と取組をしたことによる影響」についてインタビューを実施した。

3. 分析方法

調査対象者の所属学部、教職経験年数、特別支援学校勤務年数、現在の勤務校の勤務年数、社会教育士経験年数はそれぞれ多様であり、社会教育士の講習を受講するきっかけや学校内での取組は個別性が高いことから、本研究では質的研究のアプローチを用いた。

1 時間ずつのインタビューにより得られた 10,782 語 (360 文) のテキストデータをローデータとした。3 名のインタビューの内容は詳細かつ多様であったため、テキストマイニングで質的に分析することとした。テキストマイニングは、テキストを客観的に分析することで、テキストの大筋を把握し、テキスト中に隠された構造を明らかにするうえで有用である。テキストマイニングは、樋口 (2014) が開発した KH-coder (Version:3b01h.exe) を用いた。手続きとしては、まず複合語検索を行ったところ、「社会教育士」という言葉が「社会」と「教育士」、「社会教育」と「士」に分かれたため、「社会教育士」と切り出されるよう、強制抽出する語を整えた。強制抽出する語は、「社会教育士」、「特別支援学校」、「特別支援教育」、「養護学校」、「共生社会」、「地域連携」、「働き方改革」とした。また、分析の精度を上げるため、「学校教員」、「教師」、「教員」を「教員」として表現の統一を行った。「先生たち」については、自分のことを含めずに使用していることから、「教員」とは別に扱った。次に、語同士の共起関係の強さを Jaccard の類似性測度に基づいて描画される共起ネットワーク図を用いて、社会教育士を有する特別支援学校の教員の社会教育に関する認識のカテゴリ化を検討した。共起関係の強い語は線で結ばれ、出現頻度が高いほど大きな円で示される。

III 結果

1. 調査対象者

基本属性のうち、教職経験年数は 24 年、11 年、7 年であった。3 名のうち 1 名は、学校の中で地域連携コーディネーターとしての役割を担っており、学級担任をしていない。3 名とも

学校種は特別支援学校の勤務年数が最も長く、うち1名は高等学校の勤務経験を有していた。調査対象者の属性を表1に示した。

表1 調査対象者の属性

属性	A	B	C
所属学部	小学部	高等部	中学部
教職経験年数	24年	11年	7年
特別支援学校勤務年数	24年	11年	4年
A 特別支援学校勤務年数	8年	2年	4年
社会教育士経験年数	2年	2年	1年

2. 特別支援学校教員の社会教育に関する認識

抽出語について、360文の総抽出語数は10,782語であり、そのうち、助詞や助動詞等一般的に用いられる語を除いた「使用語」は3,908語で、分析対象とする「異なり語数」は1,274語、そのうち987語が「使用語」であった。

描画する共起関係上位60位に設定して、共起ネットワークを行ったところ、抽出語数は30であり、その抽出語と頻度は表2に示す。また、実線で結びついた7つのサブグラフが描画された(図1)。各サブグラフについて、元文章に戻りつつ、前後文の意味内容を踏まえてカテゴリ名を以下のようにした。

(1) 「学校と地域を繋げる教員の働き」

「学校」、「地域」、「教員」、「言う」、「作る」、「繋がる」、「考える」の7語で構成されたサブグラフである。具体的な発言例を挙げると、「他の特別支援学校で、僕が魅力化推進室長させてもらっていた」、「他の特別支援学校にいる時には、地域資源を活用しましょうっていう研究をやっていた。面白くて勉強になった」、「Instagramには素敵なグランドデザインが載っている。これを作るために島民、町民に自校が必要かどうかのアンケートを取って、1週間ぐらいで100人ぐらい回答された」、「コーディネーターを学校と地域に浸透させるうえで島前高校っていう答えがあるから、そういうところ特別支援学校は連携や理解が取れてないというのが正直ある」、「とにかく、社会と学校をとにかく繋ぐ人が不可欠だなと僕は思っている」、「見方が教員に広がると、教育の在り方も変わってくるかなって思ったりはする。教員の幅を広げないと、結局教員の視線、価値観でしか子どもと向き合えない」、「今後は卒業してもしたいと言えるように地域でできる場所を作りたい」、「地域と学校のお互いの言い分を掛け合えるように橋渡しするのが私たちの仕事」との発言があった。

(2) 「社会教育の視点での子どもたちとの関わり」

「教育」、「社会」、「子」の3語で構成されたサブグラフである。「社会教育に誰も取りこぼさないっていう視点を入れるために、特別支援教育に関わる自分にできることって何?という問いは常に持っている」、「何もしていない人といろんなことを吸収してきた人では、関わりも出る効果も違うと思う。社会教育で勉強した知識のおかげで、発言の質が変わることによってより深さが出る」、「地域に出ても大丈夫なように今はしっかりと教育課程とか教育を通して、学校教育活動の中で子どもたちの最大限できることを一生懸命やる」との発言があった。

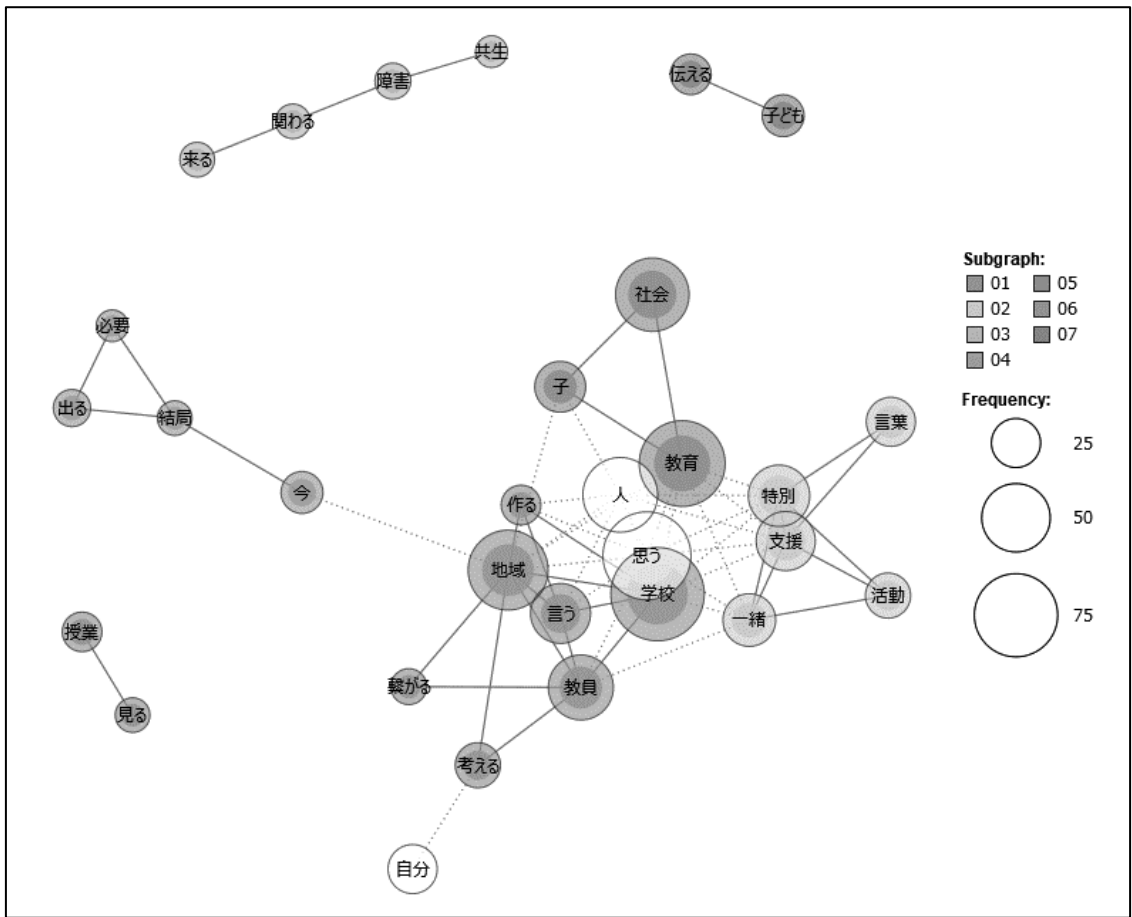


図1 インタビュー内の発言における共起ネットワーク

表2 抽出語と頻度

抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度
学校	94	一緒	29	出る	16
思う	86	自分	26	繋がる	13
人	62	言葉	25	障害	13
地域	62	社会	24	関わる	12
教員	59	考える	22	結局	12
教育	57	活動	21	見る	12
子ども	49	今	20	来る	12
言う	38	伝える	17	子	11
特別	35	作る	16	共生	11
支援	35	授業	16	必要	10

(3) 「一緒に活動することで伝える特別支援教育の魅力」

「特別」、「支援」、「言葉」、「一緒」、「活動」の5語で構成されたサブグラフである。「単独の学校でこれやっていますではどうしようもない部分もあって。特別支援学校同士の横の繋がりを大切にしたい。聾学校に情報交換しに行って話をしたりもしている」、「理解啓発が大事って言われるけど、特別支援教育って理解啓発の仕方になるとすごく壁が高いというか。言葉で伝えてわかってもらうだけじゃなくて、一緒に活動することが肝だと思う」、「地域の人は教育課程ってなに？ってなる。要するに、学校の目標の、子どもたちにこうなってほしい、のを一緒に考えて子どもたちを育てたいっていうことを伝えるために、ちょっとずつ伝わっていくように言葉を噛み砕く」、「共生社会として子どもたちが社会参画しやすくなることを目指して教育していくのが特別支援学校の役割」との発言があった。

(4) 「共生社会の中で障害のある人と関わるハードルを下げること」

「共生」、「障害」、「関わる」、「来る」の4語で構成されたサブグラフである。「共生社会を謳う社会教育に関わる人の考え方として、そこに障害を持った人っていう考えも常に入れてほしい。ただ、特別支援学校の教員で社会教育士を持つ教員だから思うのかもかもしれないけど」、「教員、同僚とかに対しては、『わ、地域に出るって楽しそうだな、関わってみたいな』って気持ちをあげるのと、心のハードルを下げる。これは地域に対しても同じ」、「地域対抗ボッチャ大会をやって、地域の方にも来てもらって、一緒にボッチャ大会を教員と地域の人でやった」との発言があった。

(5) 「理想と現実のギャップ」

「必要」、「結局」、「今」、「出る」の4語で構成されたサブグラフである。「ボッチャやりたい子どもはいるけど大会は少なかったり、結局重度のボッチャの本来の大会に出るその障害の度合いに当てはまる子どもって少ない」、「働き方改革のことはかなり言われて、今学校から地域へ出る移行期間の時に、その中で部活動を立ち上げるのは難しかった」、「噛み合わない、何を言ってるのかわからないと、はいはいはいって流れてしまうことが多くて、それでは結局繋がりが合えないから。教員視点で学校ベースの考え方は子どもたちにとって必要だよな」、「子どもたちは教えた時はわかっているのに、1歩外に出て実際にやってみたらできない。傘の差し方がわからない。実際の生活力の難しさがある」との発言があった。

(6) 「子どもと地域と学校について伝え合うこと」

「伝える」、「子ども」の2語で構成されたサブグラフである。「人との関わりの中で、伝えるとか、話すとか、意思を伝えるのはすごい大事」、「きっと子どもたちの見方、捉え方もそうだし、子どもたちに伝える内容も変わってくると思う。自分のこの価値観とかを柔軟にしとく」、「いかに教員に自分事として捉えてもらえられるように伝えられるかとか、そういう翻訳とか通訳みたいなことは大切」、「知識のおかげで、発言の質が変わることによってより深さが出てきたから、言葉で伝えるのもうまくなったし、人を巻き込む力もすごくついた」、「事前に学校、学級の様子ややりたいことを伝えたり、打ち合わせの日程調整までやったり」との発言があった。

(7) 「授業の可視化」

「授業」、「見る」の2語で構成されたサブグラフである。「1年間やってみて生徒がどういう風に成長したかっていうのがちゃんと評価できるように授業って組み立てればいいなと思って

いる。人との関わりの中で、伝えるとか、話すとか、ひとつずつ伸ばせばいい」、「授業でやったことを教員が全て残して、どこで誰と何をしたのかがぱっと見て分かるように残していこうと思う」、「1回きりの途切れた関係にはならないように、授業が終わってもその関係性を社会教育者、コーディネーターの立場から繋げられるように、資料や発信ツールを作る」との発言があった。

IV 考察

描画された実線で結びついた7のサブグラフは、「学校と地域をつなげる教員の働き」、「社会教育の視点での子どもたちとの関わり」、「一緒に活動することで伝える特別支援教育の魅力」、「共生社会の中で障害のある人と関わるハードルを下げること」、「理想と現実のギャップ」、「子どもと地域と学校について伝え合うこと」、「授業の可視化」と命名された。それぞれのサブグラフについて検討したい。

「学校と地域を繋げる教員の働き」について、社会教育士の資格がある教員は学校と地域をつなげる存在であると自覚しており、さらに社会に目を向けることで教員の幅も広がり、様々な価値観をもって子どもに伝えることができるようになると認識していると考えられる。また、発言の内容は地域住民へのアンケート実施やコーディネーターの取組などの経験を踏まえたものだと推測される。

「社会教育の視点での子どもたちとの関わり」について、教員の発言にもあるように、誰も取りこぼさない視点を社会教育に入れていくことと、子どもたちとの関わりに幅広い価値観が必要であるとの認識を持っていると考えられる。社会教育士は共生社会の実現のために活躍することが期待されているが、実際に特別支援教育についての考え方は社会教育にはまだ浸透しきっていないと推測される。そのため、特別支援学校の教員として誰も取りこぼさない視点を広げることが必要であるだろう。家族形態の変化、価値観やライフスタイルの多様化により、地域社会における支え合いやつながりが希薄化し、地域社会の停滞（文部科学省，2021）が指摘されている。様々な視点を持って子どもと関わるのが、地域への理解につながると考える。

「一緒に活動することで伝える特別支援教育の魅力」について、これまでの特別支援学校と地域の連携についての先行研究においても、「地域とつながる視点を全教職員が意識した上で教育活動を行う。そして地域での活動を重視する学校の雰囲気を継承しつつ、地域の人材を呼び込み学校を活性化する取り組みが必要である」（藤本，2022）と指摘されている。このように、学校と地域の連携のための働きかけとして、特別支援教育について、または地域について相互理解するために一緒に活動を行うことが重要であると認識していると考えられる。

「共生社会の中で障害のある人と関わるハードルを下げること」について、社会教育士の資格がある3名の教員は社会教育に特別支援教育の視点をもっと広げていきたいという考えがあり、それこそが共生社会の実現に繋がると述べていた。自らの役割の認識として、地域の方や同僚、子どもたちに向けて関わることを促し、活動を設定することによってハードルを下げることにあると考えられる。このハードルとは、普段から関わらないことによる接し方の不安感からくるものであり、接することで「子どもたちは地域の様々な人たちと実際に活動を共にし、関わり合うなかで人から認められ、そして自分も人の役に立つ存在であることを実感する」（本

多・武田, 2019) ことに繋がる。そのため、接し方や関わり方が分かればハードルも下がっていくのではないかと考える。

「理想と現実のギャップ」について、共生社会や地域連携を図るために、子どもを中心に地域住民や保護者を巻き込んだポッチャの部活動づくりを行っており、ポッチャであれば地域住民と一緒にスポーツをする機会をつくれると考え、部活を立ち上げていた。しかし教員の働き方改革のなかでの立ち上げは厳しい場面があったことから、子どもの声や教員のやりたい思いだけではかなわない現状があった。厚生労働省(2019)で指摘されているように、地域における共生社会を実現するためには、実践を通して必要性に気づき改善していく姿勢が重要である。障害がある人となない人で同じスポーツに向き合う共生社会の実現のために、教職員の負担が増えすぎないように配慮しながら活動を進めていく必要がある。

「子どもと地域と学校について伝え合うこと」について、地域のことを子どもや同僚に伝え広めることや、学校のことを地域や他校に伝えることが、社会教育士の資格がある教員としての役割と認識していると考えられる。文部科学省(2018)が、特別支援学校卒業後の生徒たちの環境として、子どもは地域を知り地域が子どもを知っていることの大切さを指摘していることから、学校が積極的に繋がりを作ることは子どもたちの卒業後の環境にも影響していく。地域と子ども、教員と教員、地域と教員をつなぐ役割を社会教育士の資格がある教員が担うことで、地域の学校理解と学校の地域理解につながり、子どもたちの生涯教育が促進されると考えられる。

「授業の可視化」について、子どもの成長を記録することや保護者への発信を行うことはもちろんだが、地域に対し、どのような活動が行われているかについて発信することが大切であると認識していると考えられる。これは、特別支援学校が地域と関わる活動として誰と関わっているのか、どのような分野について学習しているのかについて知ってもらうことに加え、教員が入れ替わる学校という職場の中で地域とのつながりを持続させる目的も含まれている。つまり、学校活動の発信は、学校について地域に理解してもらうためだけでなく、教員が異動しても地域との繋がりを継続するために必要な作業であると言える。

学校が地域と連携するメリットを子どもや地域の方に理解してもらうことはもちろんだが、地域との連携に携わっていない教員や地域との連携に対して消極的な教員に、その良さを共有していく立場という認識を持っていることが推測される。これは、社会教育士の資格がある教員の役割であると考えられる。また、学校の中に留まらず地域にも出ていくことで、学校の中だけで完結させている学習を学校教員では伝えられない地域の人ならではの知識や技能を頼ることで発展的で有意義な学習の時間となると考えられる。

しかし、「地域とのやりとり」による教員への負担は社会教育士の資格がある教員だけで解決しないため、多くの教員が地域と連携する意識をもつ必要がある。「『つなぎの員』としての自覚をもった教員が、校内部の協働を進め、学校外部との協働につなげていく」役割があるとされる(芹澤・芝山, 2021)。地域連携について一部の教員が窓口となるだけでなく、全教員が地域と積極的に連携をとる余裕が生まれるように、働き方改革がさらに進められるべきである。また、社会教育は学校外で得られる学びであり、学校教育と社会教育では専門の言葉が異なる(高橋・杉田・山崎, 2018)。そのため、言葉のギャップを軽減する役割が社会教育士に

は求められている。地域に視点の軸を持っている教員と学校に視点の軸を持っている教員とでは論点や主張が異なるため、自然と言葉のギャップが生まれている。客観的に捉えたり、中立的に翻訳的機能を担ったりできるよう意識する必要がある。

そのためにも、社会教育士の資質であるファシリテート能力やプレゼンテーション力（文部科学省，2020）を生かしながら、異動しても継続できるシステムを作るために、積極的に通信文書や ICT，HP（ホームページ）などを活用して多方向に発信していく必要がある。

A 特別支援学校では、社会教育士の資格がある教員が地域へ向けた文書をすべて作成するのではなく、各学年部の取組を学校内外ともに共有する目的ですべての学年部が一部分ずつ手分けして作成していた。このように、窓口担当教員の一人がいなくなったら継続できなくなるシステムではなく、分担し、共有しながら作成していく。そして「発達・成長の目的の促進のための学習の課題に挑戦する過程を、伴奏し、必要な支援を行う総体が『支援』であり、それを目指す者が『支援者』である」と植村（2018）が述べているように、説得力のあるキーワード、言い換えの翻訳力をつけたうえで、コーディネートを行うことが、教員と子ども、学校と地域をつなぐうえで大切である。

V 今後の課題

本研究の調査対象者は3名のみであったため、更に調査対象者を増やして検討する必要がある。また、勤務する特別支援学校の障害種は肢体不自由であったため、知的障害や病弱などの他の障害種の特別支援学校も調査する必要がある。加えて、特別支援学校だけでなく特別支援学級を担当する教員の認識についても調査する必要がある。

社会教育士の資格がある教員の実践については詳細に検討できなかった。質的調査だけではなく、アンケート調査などの量的調査もしながら、地域活動の実践を検討する必要があるだろう。

文献

- 藤本寿雄（2022）地域とともにある特別支援学校を目指して．現代学校経営研究，28，85-94.
- 原田祐紀（2011）特別支援教育における児童生徒と地域をつなぐ教育活動に関する研究－地域資源を活用した授業を通して－．やまぐち総合教育支援センター平成23年度長期研修報告書，1-12.
- 樋口耕一（2014）社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して－．ナカニシヤ出版.
- 本多由香・武田篤（2019）特別支援学校における地域資源を活用した授業の有効性に関する検討－教師と生徒へのインタビュー調査から－．秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，41，63-68.
- 厚生労働省（2019）共生社会の実現に向けて．https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_00506.html（2023.11.27 閲覧）
- 芹澤光・芝山明義（2021）これからの学校における教員の「役割」について－学校内外の協働関係構築における課題に注目して－．鳴門教育大学学校教育研究紀要，35，187-194.

- 鈴木絢子 (2023) 注目の新制度『社会教育士』探究学習や地域連携のニーズで学校の需要増.
東洋経済オンライン .[https://toyokeizai.net/articles/-/717875#:~:text](https://toyokeizai.net/articles/-/717875#:~:text=) (2023.12.7 閲覧)
- 文部科学省 (2013) 学校と地域の連携. https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/giji/_icsFiles/afiedfile/2015/12/21/1365116_009.pdf (2023.12.7 閲覧)
- 文部科学省 (2017) 特別支援学校幼稚部教育要領小学部・中学部学習指導要領.
- 文部科学省 (2018) 学校卒業後における障害者の学びの推進方策について. https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2018/09/18/1409252_1.pdf (2023.11.24 閲覧)
- 文部科学省 (2020) 社会教育士って何. https://www.mext.go.jp/a_menu/01_1/08052911/mext_00667.html (2023.12.18 閲覧)
- 中央教育審議会 (2021) 令和の日本型教育の構築を目指して－全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現－. https://www.mext.go.jp/content/20210428-mxt_kyoiku01-00014639_10.pdf (2023.10.24 閲覧)
- スクール・アドバイス・ネットワーク (2013) 学校と地域をつなぐ地域コーディネーター育成テキスト.
- 高橋平徳・杉田浩崇・山崎哲司 (2018) 地域との連携・協働を担う教員に求められる資質・能力を構成する概念に関する一考察. 大学教育実践ジャーナル, 16, 47-52.
- 植村秀人 (2018) 学校と地域の連携の課題－地域への還元の視点から－. 生活体験学習研究, 18, 17-23.
- 若園雄志郎 (2021) 学校と地域の連携をすすめるために栃木県における社会教育主事有資格者の活用と「地域連携教員」. 地域志向学研究, 5, 5-11.
- 山口県立山口南総合支援学校 (2019) 特別支援学校と学校が立地する地域の効果的な連携・協働体制による防災体制の構築. https://manabi-mirai.mext.go.jp/upload/2019fuchuforamu_bunkakai4-1.pdf (2023.10.23 閲覧)